
麗しの王

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麗しの王

【Nコード】

N9095S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

美しいものを愛する王がいた。王は自分の国も美しいものにしようとした。その王が気付いたことは。世の中に完璧を求めてもどつかというお話です。

第一章

麗しの王

この国の王はとにかく美しいものが好きだった。

それでだ。常に家臣達に言うのだった。

「金がかかってもいいからだ」

「美しいものをですか」

「集めよというのですね」

「そうだ、とにかく集めるのだ」

こう言うのであった。それも常にだ。

「よいな、それは」

「はい、それでは」

「いつも」

こう話してだった。家臣達はその金を集めよつとする。しかし「こでだった。

王は同時にこうも言うのであった。

「国も美しくしろ」

「国もですか」

「この国もまた」

「美しくですか」

「そうだ、街も村もだ」

王はそこにも目を向けているのだった。

「綺麗にしろ」

「町や村を綺麗にといいますと」

「つまりは」

「外だけではなくですか」

「外だけ綺麗にしてどうする」

王は徹底していた。その言葉は厳しい。

「家の中も民の服もだ」

「全てですか」

「奇麗に」

「そうだ、奇麗にとはだ」

王は言い加える。実に厳しくだ。

「栄えさせるということでもある」

「そういう意味でも奇麗にですか」

「この国をそうせよと仰るのですか」

「つまりは」

「その通りだ。とにかく奇麗にするのだ」

王の言葉はとにかくそれにこだわったものだった。それは考えものである。何かにつけて美というものにこだわり続ける王であった。

王のその言葉を受けて様々な美術品や芸術品が集められる。

そして内政が整えられ街も村も奇麗になる。そして栄えさせられた。

「市場を充実させて」

「田畑を耕し」

「堤を作り」

「そして道を整理して」

ありとあらゆるものをよくしていった。その結果だった。

国は美しくなっただけではなかった。豊かにもなった。臣民達は奇麗な服を着て豊かな暮らしを楽しめるようになった。しかしだ。

「こら、ゴミを落とすな」

「落書きをするな」

「犬のうんこはちゃんと処理しろ」

「決められたところに捨てる」

常に色々注意されることになった。

それで誰もが息詰まる状況になった。しかもだ。

若し破ればだ。それだ。

罰金だった。酷い場合には鞭打ちだ。王は刑罰も厳しくしたのだ。このことに臣民達は嘆いた。しかし王はこう言うのだった。

「これは当然のことだ」

「注意と厳罰がですか」

「当然なのですか」

「そうだ、当然だ」

こう家臣達にも言うのである。

「何か問題があるのか」

「臣民達はあれこれ言われることに辟易しています」

家臣の一人が言った。

「そして厳罰には困っています」

「そうです」

「それについてなのですが」

他の家臣達もここで言うのだった。

「せめて刑罰だけでもです」

「緩やかにすべきなのは」

こう王に進言する。しかしだった。

第二章

王はだ。その彼等にも言うのだった。

「ならん」

「それはですか」

「駄目だというのですか」

「そうだ、駄目だ」

王はまた言った。

「それはだ。何があっても駄目だ」

「それは何故でしょうか」

「一体」

「少しでも注意をせず刑罰を緩くすればだ」

その場合はどうなってしまうのか、王はこのことも話すのだった。

「それだけでそなた達も臣民達も油断するな」

「そしてそれによつてですが」

「奇麗にしなくなる」

「そう仰るのですね」

「その通りだ」

その声はやはり厳しい。

「だからこそだ」

「左様ですか」

「どうしてもなのですね」

「臣民達の税は軽くしてある」

これは事実だった。彼は決して悪政を敷いてはいない。国を美しく豊かにするということでは確かに善政である。しかしなのだった。

「暮らしは辛くはない筈だ」

「生きるにおいてはです」

「何でも食べられます」

「着るものも奇麗で」

「衛生的にも問題はありません」

「では何の問題もない」

王はそれで充分だと言うのだった。

「違うか」

「うつむ。そうですね」

「それでなのです」

「このまま」

「そうだ、このまま厳しくいくぞ」

彼の考えは変わらなかつた。そのまま厳格な統治を続けていく。

世界から美術品や芸術品も集まりそれを見る為に観光客も集まってきた。しかしだつた。

どの観光客もだ。辟易して言うのだった。

「ここはな」

「生きにくいな」

「ああ、もう一度来るとなるとな」

「苦しいな」

これが彼等の言葉だつた。

「美術品はいいんだがな」

「街も奇麗だしな」

「けれどやっぱりな」

「そうなんだよな」

ここで彼等の言葉が変わる。

「住んでみたい国じゃないよな」

「本当に絵を見るだけだよな」

「何だよな、これって」

「生きてるって感じがしないよな」

「ああ」

こう言うのだった。観光客は二度来る者は少なかつた。

それで美術館等も今一つ入りが悪かつた。王はこのことに不思議

なものを感じていた。

それだ。こう家臣達に問うのだった。

「何故だ、あれだけ美しい場所に人が集まらないのだ」

「確かにあまり振るいませんね」

「そうですね」

家臣達も王の言葉に答える。

「ですがこれは不自然ではありません」

「当然だと思います」

「これは」

こう王に話すのだった。

「ですからこれはです」

「どうするべきかですが」

「ここは」

「何故そうなる」

王はあらためて家臣達に問う。

「不自然ではなく当然と言つが」

「はい、左様です」

「その通りです」

また答える家臣達だった。

第三章

「この状況はです」

「何故ならです」

「何故ならという」と

「人が生きている感じがしないからです」

「だからです」

それだだというのである。

「人がいる感じがしません」

「全てが絵画の様な国ですから」

「それではやはり」

「美しいのは駄目なのか」

王は彼等の言葉に怪訝な顔になった。

「それは」

「美しいのはいいです」

「それはです」

だが、だった。家臣達はそれはいいと言っただった。しかしだった。

彼等はこちらも話すのだった。

「しかしあまりにも美しいだけだとです」

「人はそこに安心できませんから」

「それでなのです」

「それでなのか」

王は家臣達の言葉を聞いてだ。玉座で愕然となっていた。そしてそのうえでだ。疲れきったような顔でこう呟いたのだった。

「では余が今までやってきたことは」

「度が過ぎました」

「あまりにもです」

「そうだったのだな。やり過ぎだったのか」

「人は美し過ぎても息苦しくなり」

「安心できません」

「ですから」

家臣達はさらに話していく。

「ここはです」

「もう少し緩やかにされてはどうかでしょうか」

「統治を」

「そうするべきか」

王はここでは目を閉じた。そのうえでの言葉だった。

「ここは」

「はい、それではです」

「そうしましょう」

「是非」

「わかった。民を苦しめるつもりもおかしな国家も作るつもりもない」

王とて悪意のある人物ではない。美しい国にするというのも彼なりの考えがあつたのだ。しかしそれがおかしいとわかつてた。彼はこう言ったのだ。彼はこう言ったのだ。

第四章

「それではだ」

「はい、それでは」

「これからですね」

「統治をあらためることにする」

疲れた様子は消えていた。そのうえでの言葉だった。

「よいな、それでは」

「はい、では今よりですね」

「そうして」

「本当の意味でいい国にする」

もう美しい国とは言わなかった。そうしてだった。

あまりにも厳しい注意も刑罰もあらめられた。そして意固地なまでの清掃もなくなった。臣民達も貴族達もその服はいつも奇麗で整ったものでなければならぬということもなくなった。それであつた。

国はよくなった。多くの人間の顔に笑顔が戻ったのだ。

それを見てだ。王は言うのだった。

「人は美しさを求めるな」

「はい」

「それはその通りです」

家臣達もこのことは認めた。それは事実だった。

「しかしそれでもです」

「それだけでは駄目なのです」

「余裕か」

王は言った。

「ゆとりとも言つな」

「はい、それです」

「それが必要なのです」

「人には」

「そういうことだな。そしてそれは」

王の言葉は続く、今度はこう言うのであった。

「国家についてもだな」

「その通りです」

「では陛下」

「これからは」

「美しさよりもさらに大事なものを求める」

彼は言った。

「それは人が笑顔で暮らせる社会だ」

「それをですね」

「それを求められるのですね」

「美しさは忘れないが」

これは忘れないとした。彼も考えている。

「だがそれ以上にだ」

「余裕がありそして」

「人がその中で暮らせる社会をですね」

「目指されるというのですね」

「そうしていこう。これからはだ」

実際に今はそうしているがこれからもだと言っているのである。王は決
めていた。

そしてその決意の下政治を行いだった。国は本当の意味でよくな
っていったのだった。

人も国も美だけ、豊だけでは駄目である。そこには他のものも必
要である。それが何かということだ。この王は学んだのだ。それ
は彼にとっても民にとっても国にとってもだ。実に幸いなことだっ
た。

2
0
1
0
·
1
1
·
1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9095s/>

麗しの王

2011年5月1日22時40分発行